1

携帯電話が震動したのは、列車が熱海を過ぎたときだった。静岡で停車する最終の東京いきひかりはひどくすいている。

デッキにでる必要はないと判断した。同じ車輛に私以外の乗客はいない。

「――はい」

「押野（おしの）です。何時に到着されますか」

「十一時半くらいです」

「迎えの者をやらせます」

「けっこうです。銀座ならひと駅ですから」

「ご遠慮なさらずに。八重洲北口にハイヤーを回しておきます。東海という会社のハイヤーです。運転手にプラカードもたせますので」

「恐縮です」

「ではのちほど」

押野はいって、電話を切った。

私は携帯電話をしまい、窓を見た。列車はトンネルに入っていた。自分の顔が映っている。

東京に復帰して二年が過ぎていた。調査の仕事をしているときを除けば、毎週末は車か新幹線で静岡の三保に帰っている。わずらわしいと感じていた筈の共同生活の場を、私はいまだに「我が家」と感じているのだった。

薬物依存者のための相互更生補助施設「セイル・オフ」は、清水市と駿河湾を見おろす日本平にある。古くなり、閉館したホテルを財団が買いとり、改造したのだ。

私はそこで約四年を暮らした。「セイル・オフ」に医師はいない。治療が必要な中毒患者を受けいれる施設ではないからだ。私がそこでしたのは、カウンセラーの真似ごとのようなものだった。話を聞いてやったり、メンバーに代わって雑用をこなす。手紙を書き、電話をかけ、人と会う。「セイル・オフ」に入ってくるメンバーは〝卒業〟の決心を固めるまでは、外の世界、特に今までの人生とかかわりのある外界と接触をもつのをひどく恐れる傾向がある。

二年前、財団の理事長、沢辺を通じて受けた失踪人調査をきっかけに、私は東京に復帰した。事務所をもたぬ探偵ではなく、もった探偵として。

三十歳になるまでの八年間、私は虎ノ門にある法律事務所で失踪人調査の仕事をして

いた。十代二十代の、若者の家出人を捜すのを専門としていたのだ。
たぶん私は優秀な探偵だったと思う。だがある事件を機に引退し、少ししてから、沢辺が設立した財団の仕事を手伝うようになった。「セイル・オフ」で過した間、四件の失踪人調査をひきうけた。四件については、依頼された失踪人をすべて捜しだすことに成功した。
私が探偵をやめることができないと悟ったとき、沢辺も同じ気持を私に対して感じていた。
沢辺は私のために事務所を開く金をだした。私は事務所を千鳥ヶ淵の小さなホテルに構えることにした。住居兼事務所としてセミスイートルームを借り、部屋代は財団が払う。私が探偵で得た報酬も、一度は財団に支払われることになっていた。しかし財団はそこから一切の経費をとってはいない。それは「セイル・オフ」での四年間を私が無報酬で過したことへの返礼かもしれない。
私は今、電話帳とインターネットに広告をだしている。だが実際に受ける依頼の大半は沢辺や財団の関係者を通してもちこまれるものだった。概してその方が報酬が高く、依頼される失踪人も単なる家出や駆け落ちではすまないケースが多い。
今夜これから会うことになっている押野も、沢辺に紹介された依頼人だ。
年齢は三十代の後半というから、私より少し若い。とてつもない金持で、銀座のビル

の最上階に造ったペントハウスに住んでいる。彼は日曜の深夜、正確には月曜の午前零時以降に会いたいといってきた。依頼の内容はまだ聞いていない。
――相当の変り者らしい。
今日の午後、神戸の自宅から「セイル・オフ」に電話してきた沢辺はいった。
――君の友人は皆、そうだろう。
――お前も含めてな
そんな会話を交わし、私は静岡から新幹線に乗ったのだった。
毎夕、「セイル・オフ」ではメンバーどうしによるミーティングが開かれる。ミーティングではそれぞれが経験談、特に薬物依存におちいることになったきっかけと、ぬけだそうと決心した理由を話しあう。
私はオブザーバーとしてそこにいる。ほとんどの場合、口をはさむことはしない。ただメンバーが薬物依存をぬけだすのを困難と感じる理由を外の世界に抱えていて、それについての意見や情報を求められたときだけ、言葉を発することにしていた。
薬物依存者にはねじれた連帯感がある。その連帯感が最も強く発揮されるのは、薬物依存からぬけだそうとする裏切り者に対したときだ。
外の世界において、薬物依存者は同じ依存者以外の仲間をもちようがない。彼らはたいていの場合、職場や学校で疎(うと)まれ、家庭でももて余されている。さらに彼ら自身が胸

の内に果てしない自己嫌悪を抱えている。それを分かちあえ、表面上でも理解しあえるのは同じ薬物依存者でしかない。したがって、仲間からぬけだし、薬物依存から立ち直ろうとする者に対しては、嫉妬からくる激しい憎悪を感じる。ぬけだす者は、疎外や中傷、ときには肉体的暴力に耐えなければならない。しかもそれは、これまで唯一、心を許せる存在であった人間たちからもたらされる。

「セイル・オフ」が集団生活の場である理由がそこにある。

メンバーにとって、外界にあるのは自分に冷淡な〝まっとうな世の中〟が、今では自分を憎んでいるかつての依存者仲間しかない。それらにひとりで対抗して生きていくことは、どれほど意思の強いものであっても難しい。

ぬけだそうとする者にも仲間が必要なのだ。外の仲間に対する、内の仲間。それによってメンバーは心の均衡をとる。

こうした集団生活を送る更生施設を冷笑する人間たちがいるのを私は知っている。大のおとなが肩をよせあって暮らすなど、まるで新興宗教のようで無気味だ、と彼らはいう。しかもまるで学生のように日課を決められ、互いの人生を話しあい、後悔や反省、そして慰めにいきつく姿は、滑稽であるとすらいう。

そうした人々は、たいていの場合、自分の意思は強く、薬物依存とは無縁だと信じている。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。